

## “グローバル水産研修”

### —ニュージーランド水産業の発展を願う

ニッスイ（日本水産）は本年5月で創業100周年を迎えた。東日本大震災の影響で100周年記念のイベントは中止となったが、創業以来「価値を創造し続けることによって社会にお役立ちすること」を基本理念として事業活動に取り組んできた。さらに、次の100年への基礎固めを目指す2006年から11年までの中期計画（新TGL計画：“True Global Links”、“True Global Leader”を意味する）では、「水産資源から多様な価値を創造し、お客様にお届けすることを通して、世界の人々の健康で豊かな生活の実現に貢献する」ことをニッスイの使命と定めた。

社会貢献もこの考えに沿い、水産業を通じての各種活動を展開しているが、その1つ“グローバル水産研修”について紹介したい。

#### 2002年にプログラムスタート

2001年、ニッスイはニュージーランド最大の水産会社 Sealord 社（以下S社）の株式を50%取得した。日本と同様に海で囲まれた島国である同国で水産業は重要な産業であり、水産企業の株式を24.9%以上取得することは禁じられている。しかし、両社の機能統合によるシナジー効果が、同国の水産資源の最大活用につながるとして特例的に許可された。その結果S社の株式はワイタンギ条約<sup>注1</sup> 漁業委員会（TOKM：Te Ohu Kaimoana<sup>注2</sup>）が50%、ニッスイが50%保有。S社はニッスイのグループ会社としてTOKMの漁業権を利用する権利を持つことになった。

これを機に、同国の先住民であるマオリ族を主体としたニュージーランドの水産業発展に貢献することを目標に始められたのが“グローバル水産研



応募を呼び掛ける TOKM web サイト

修”である。

開始したのは2002年。現地のTOKMが募集活動をし、ニュージーランド全土から水産業の発展を願う多くの若者が応募した。TOKMとニッスイが協働して選考にあたり、1期生として2名が選出され、水産先進国の日本で研修を受けた。以降、毎年1～2名が選出され現在にいたっている。

注1：1840年、ニュージーランド北島ワイタンギにおいて、当時武力衝突が絶えなかった先住民マオリとイギリス王権との間で締結された停戦条約。この条約の中でマオリの漁業権が認められた。

注2：ニュージーランド政府からマオリに返還された漁業資産を維持し、その資産を後に分配することを目的として1989年に設立。マオリの漁獲枠を管理する法定機関。

#### 日本を学び、先端水産業を学ぶ

研修生が来日するのは毎年2月ごろ、最初に日本語学校に通い、日本語の習得と日本文化理解から研修はスタートする。水産業には特殊な用語も多く、日本語学校に用語の対比表をつくって授業してもらおうといった工夫もしている。例えば「沈下式生簀⇒Chinka-siki ikesu⇒Submergoble」「マダイ⇒Madai⇒Red Sea Bream」といった具合



2010年第8期生修了式(左から2番目 Taneさん、4番目 Ryanさん)



イケメン愛妻家の  
Puohoさん  
(第9期生)

だ。ちなみに、今年の研修生 Puohoさんは日本語が達者でほとんど問題がないレベルだそう。

日本語研修が終われば、本社の各事業場でニッスイの事業内容や日本全体の水産業について学ぶ。その後は(研修生の希望に沿ってカリキュラムを組んでいるので研修生ごとに内容は異なる)各研究所や工場、地方の養殖現場などに出向いて研修する。そして、2カ月弱の夏休み(帰国)を挟んで後半の研修を続けることになる。研修の最後には日本での研修の発表会と修了式がある。9カ月間の研修をまとめるのは大変な作業だ。研修終盤は資料作成にかりきりとなるが、この過程を通じて自分の学んだことが体系的に身に着くので研修生にとってもいい経験になるようだ。

発表会は、ニッスイの役員室で社長・役員と TOKM のメンバーの前で行われる。その発表会・修了式が終わると、TOKM のメンバーも一緒になって、オールブラックス(ニュージーランドのラグビー代表チーム)の試合でおなじみの HAKA(踊りの意味。マオリ族の戦いの儀式)を披露してニッスイとの親睦をはかるとのことで、いかにもお国柄を感じさせる。

帰国後に S 社に勤務しなければいけないという制約は設けていないが、研修生のその後をたどると S 社に勤務する人が多い。そのほかの人も何らかのかたちで水産業に関与しており、ニュージーランド水産業の発展に寄与していることが分



中谷水産(株)で養殖実習する  
Maniheraさん(第7期生)

刺身を楽しむ  
かる。

## 日本ファンになって欲しい

研修生の多くは中野のウィークリーマンションで日本生活を過ごす。中野の街の良さが語り継がれていることから、中野を希望する研修生が多いとのこと。休日には日本のラグビーチームにいる友人とラグビーをしたり、日本の各地を旅行したりして日本生活をエンジョイする。昨年の研修生は富士登山まで経験した。

マオリ族は家族関係を大事にするということで、家族連れで来日するケースもある。そのため、お子さんが近所の公園で付近の子どもたちと遊んだりして仲良くなったこともあるようだ。10月ごろには2~3週間のホームステイがあり、日本をさらに深く理解してもらう仕掛けもプログラムに含まれている。

このプログラムには、単なる研修だけではなく日本を理解してもらい、日本ファンになって欲しいというニッスイの思いも込められている。地道な活動ではあるが、同じ島国としてニュージーランドの水産業の発展に寄与し、世界の水産業の発展にも共に貢献したいという思いがあると感じた。(本誌編集部 間島輝利)

※取材協力・写真提供：日本水産(株) 人事部



地元紙に掲載された発表会での HAKA

### ◆ニッスイの社会貢献活動

<http://www.nissui.co.jp/social/community/index.html>